

Title	米国経済学思潮の今昔(下)
Sub Title	
Author	高島, 佐一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1916
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.10, No.11 (1916. 11) ,p.1599(121)- 1606(128)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19161101-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

爲め價格常に動搖して定まらざるの弊は何人も否認し難き處なり。而して余が今回の炭坑國有の案も亦さまで英人を驚かす事なく、却て大にその傾聽する所たらんと豫想する所以の者は近年に於て英國政府の炭坑業に對する監督干涉漸く歩を進め來り、今日までの所に於ても國有官營との距離決して昔日の如く大ならざるの一事是なり。先づ坑夫側に對する關係に於ては千九百八年の炭坑八時間法あり、更に千九百十二年の坑夫最低賃銀法あり。何れも其程度に於て炭坑主の自由を束縛す。更に石炭の價格に就ては昨年議會は一法律を制定し坑主が戦前の價格より一噸に付き四志以上を引上ぐる事を禁止したりしが、更に最近政府が佛蘭西に輸出す可き石炭に價格に制限を加へたるに對して、南エールヌ炭坑主が抗議するや、彼等は若し商務院の命令に従はざる時は政府自ら代りて炭坑を經營す可しとの意味の通告を受けたり。以て炭坑國有

案が決して唐突の提案に非ざる事を知る可し。私設生命保險會社の弊害は先年フェビヤン調査部の報告に依て公表せられしが、世人は既にフェビヤンと所感を同ふしつゝありや否やは斷言に苦しむ所なり。但し保險會社は今日既に國民保險法の下に所謂認可組合として勞働保險の行政に干與しつゝあるの事實は注意す可し。以上舉げたる種々の國有計畫は其自身收入を齎らすものなりと雖も、エツプ等が重きを直接收入の點に措かずして、其の國民全體の負擔能力を高むる間接の效果に措きたるや論なし、左れば以上の改革に依て國民の生産力を増進せしめたる後猶ほ如何にして歳入の増加を計る可きかの問題は殘る。エツプ等は之を所得税の大改革と財産税の賦課に求めんとす。所得税の改革中に就て注意す可きは個人の所得税に課税せずして家族の所得に賦課し、而して家族の所得を人員にて除し以て斟酌を加ふるの一事なり。即

ち五人より成る一家に五百磅の所得ある時は、百磅の所得ある者五人に對するものとして取扱はるゝなり。而して税率は百三十一磅の所得に對する一片(磅に付き)より、十萬磅の所得に對する十五志七片まで累進す。財産税は恐らく前年獨逸が軍備擴張の爲め實行したる實例に學びしものならん、エツプは十ヶ年に亘り財産價格一割の徴收を主張す。

此財政改革案は如何なる程度の歡迎を受く可きや、後報を俟つて始めて知る可きなり。余はたゞ開戦以來戦後經濟的改造に就て發表せられたる最初の根本的提案として姑らく其大要を紹介するに止めんと欲す。たゞ此案を批評するものは徒に其細目の缺陷を指摘する事なく進んで之に代る可き方案を提出するを要す。個々の點に於て如何なる不備缺點を藏するにもせよ、戦費の支拂は負擔能力大なる國民經濟を造る事に依てのみ可能なりとのエツプの著眼は時流を抜けるものと云はざる可らず。

米國經濟學思潮の今昔(下)

高島佐一郎

四

わが福田博士論すらく、英國正統學者の學說中、今日猶ほ價值を失はざるものは、金融並に貨幣に關するものは是れなり。外國貿易に關するもの亦た概ね然りと。(前掲新著一六四頁) 又た論じて云へらく、英人特有の自尊心強くして他を以て悉く劣等視するの謬想に基きたる經濟論は、貨幣並に外國貿易に關しては弊害未だ甚しからざりしも、一度汎ねく人間全體に涉たり經濟上階級間に起る諸問題殊に勞働の問題に及ぶに到りて、著しき缺陷を暴露せり。彼等は人間の心理的作用を全然度外視し、勞働を看做して純然たる一の商品とし、勞働の價は死物なるの商品價と同一なる需要供給の原則によりて定

めらるとし、……之より賃銀の法則を立せりと。(同上二六八頁)一代の領學の定言、寔に「に克く「マンチエスター」學派の通弊を喝破して妥當適切、一語の加ふべきなし。而して是れ勞働階級の地位の向上を一大旗幟とせる近世學理的社會主義の高揚せられ、獨逸歴史學派の隆興せる所以にして、亦た同時に「ヂエネラル・ウァーカー」以降の米國經濟學界の中老諸家の一新機軸を此の賃銀の本質及び其の決定法則に出ださんとする努力を、助長せる機縁なりとす左に少しく、英國に於ける勞銀本質論の小史を述ぶる所あらん。

然れども先づ茲に注意すべきは、其の意を誤まり傳へたる後ちの學説は姑らく措き、世に謂はゆる「勞銀決定の鐵則」なるものは、決して「リカード」の眞意にあらざることを、是れなり。左に「リカード」を救はんとする、鴻儒「マールシャル」の大著に據り、此の賃働の價格に關す

る「リカード」の主張を窺はん。(Marshall, op. cit., p. 508) 始め「リカード」は明かに、「食料品及び生活必需品を以つて測定せられたる勞働の自然價格 "natural price of labour" は、絶對に確定せられ且つ不變なるものと解せらるべきにあらず。……自然的勞銀は主もに民間の慣習によつて定まるものなり」と論じたるに拘らず、之に次げる推論の過程に到たり、マ氏の指摘しけるが如く、「賃銀が、生活の最低必需品を充たすべき標準より以上に騰貴するや、後顧慮の念必ずしも深からざる勞働階級の人口は忽ち且つ速かに増加するが故に、此の人口増殖は賃銀を驅りて、生活の最低平準に止ましむる如く、一の自然律によりて、決定せしむる」の義を暗示したるものあるが如く然かり、右の自然律こそ、爾後、殊に獨逸に於て、「リカード」の「鐵則」Ricardo's "iron" or "brazen" lawと稱せられ、更に社會主義者一派により、世の生

産組織が如今「資本的」又は「箇人主義的」に運營せらるゝ限り「鐵則」の作用するを免れざるべく随つて勞働階級の地位の向上改良は期せらるべきにあらずと高唱せられ、茲に社會主義者の主張を辯明するの權威としてリカードを引くの風を馴致するには至たれるものとす。然し乍ら斯の如きはリカードの主張を誤れるものたらざるを得ずして、リ氏の眞面目はマールシャルの筆端に描かれて疑義を遺さず。マ氏則ち曰く「されどリカードは管だに賃銀の必然的又は自然的制限は謂はゆる鐵則によりて確定せらるゝことなきのみならず、却つて各の邦國及び時代の地方的狀況及び習慣によりて決定せらるべきものなるを力説せるなり。加之、リカードは漸次に向上すべき生活標準の重要な確信し、廣く人道の友に求むるに、其の勞銀をして決して生活の最低標準に近付かしめざる如き、勞働階級間の自覺及び能力の發生を助成すべく、努力すべきこと

を以つてせるなり」と (Ibid. p. 509) 茲に於て可知る。「リカード」の慈腸は恰も「マルサス」の人口論を唱道したる精神の如く一の警世的立言を爲せるものなることを。

降つて「ミル」に至つては其の經濟論中明かに一層多量の人格的要素を加量する所ありしと雖も、其の賃銀本質論に就ては「アダム・スミス」「マルサス」及「リカード」等の先覺の所論以上に出づる能はずして、纔かに例へば一箇年間に一國に於て支拂はるべき賃銀の總額は一定すと云ふ底の謂はゆる「賃銀基金説の原始的形式」と聯想せらるゝものありしに過ぎず。要するに賃銀の總額は資本の總額によつて制限せらるべく、随つて資本を以つて需要を象徴するものとすれば勞働力は之が供給となり勞銀は此の需要供給の變化に伴なひて變動するものと爲るなり。然かも斯の如きは、人格的要素を重要視し、勞働能力の進化を豫定せんとする新しき經濟論の認容

する能はざる所たるは論なし。而して此の經濟理論の改造に對し、最も多く貢獻したるものは、是れ之を「ウォーカー」以降の米國經濟學者となす「マーシャル」教授が、其の功績を高揚して高き勞銀の營に之を受くる勞働者のみならず、亦た其の子孫の勞働效程を増加するの効果を論證せんとする細緻なる研究に着手せるは、纔かに近く吾人の時代に始まれるものなるが、之が研究の先達たりしは、實に「ウォーカー」及び其の以降の米國經濟學者に外ならず、斯くして新舊世界の各邦國の表呈せる産業的問題に比較研究の適用せらるゝや、高く支拂はれたる勞働の一般に能率亦た高く、隨つて高價たる勞働たらざるの義理が益々世上の注意を喚起するに至たれり」と論定せるもの、正さに千鈞の威重ありと謂つべし (Ibid, p. 510)

米國經濟界の業績果して斯くの如しとせば、其の業績の内容の歴史的発展を、考察すべく項

を新たに復た「ラフリン」氏の所論を紹介する所あらん唯だ米國の諸家中「チャー・ビー・クラーク」の論理の如きは、氏一派の深玄なる獨創的哲學觀心理觀卷に滿ち、紹介の一小筆の到底描きて全きを期し難きものあるが故に茲には纔かに其の輪廓を示めずしに止まらる。

五

米國經濟學派の嚆矢は先づ、英國正統學派の最も防備薄き部分たる賃銀本質及び勞銀決定論に放たれたり。即ち闘將「デ・ネラル・ウォーカー」が一八七五年中、最初に賃銀基金説を論難したりし以後、米國學界には、生産能力の見地より賃銀及び利子の問題を論せんとするの傾向、漸く著明なるを致せり。言ひ換ふれば從來賃銀問題を論ずるに當たり、英國正統派が相率めて之に據れりし、需要供給の勢力の排斥せられ、之に代はりて生産能力 *Productivity* の高調せらるゝの機運を示せること是れなり。此の説明に於

ては生産力とは全體としての産業力を勞働又は資本といふ如きの、箇別の生産要素の生産力といふものにあらず。然るに、一産業の生産物に於ける増加部分が、殘高所得として悉く勞働要素に歸屬すべきことを論證せんとしたる、「ウォーカー」の試みは、素と賃銀の決定せらるべき原則として、従來行はれたる需要供給以外の勢力を發見せざるべからざるの必要に出でたるものなりと雖も、此の推論に横はる缺點にして殊に實際家の不快を買ひたるものは、そが勞働以外の他の生産要素の勢力を無視せるに由る。顧みるに「フランシス・ウォーカー」及び「ヘンリー・デューデ」一派の論客は、賃銀が資本より派生するものにあらざるを論證すべく、頗る力むる所ありしも、斯かる研究は畢竟、賃銀が如何にして支拂はるべきやを明かにするに止どまり進みて幾何の賃銀が支拂はるべきやを論定する能はず。然るに吾人が知むんと欲するものは、一般

的に何が賃銀を定むるやの問題にあらずして却つて、特定場合に於て何が之を決定するかの問題にあり。是に於てか兩「ウォーカー」及び「デューデ」の論證は、未だ吾人の智識的要求を充たすに足らざるなり。

勞働に對する需要を資本とし混用したるの通弊を脱し生産力によりて之が解決を圖らんとせらる、米國學派の苦心經營は、遂に端なくも其の一命を傾けて此の問題を研究せる一大天才を生むに至たれり。「コロベア」大學の「チャー・ビー・クラーク」教授は即ち其の人なり。經濟的現象の動態的特性を力説すると同時に氏の賃銀及び利子理論は、主として生産力の理論の上に築かれたるものとす。氏は全體としての産業の生産力と、勞働又は資本といふが如き生産各要素の生産力との區別を觀念するに就き、異常の穎才を示めしたり。而して「クラーク」教授の案せる研究方法によれば、生産の各要素がの其の綜

合的所産物に寄與したる分量を判知し、且つ確定せる一單位によりて其の特殊の生産力を測定するの可能なるを、想はしむるものならず。唯だ此の新しき試みの成否は、管だに限界効用に關する假説と經濟的要素の分割とに據れるのみならず、亦た之に適用せられたる發見法の妥當なるや否やにも關聯す。而かも其の研究法は遂に難中の難たらざるを得ざるなり。先づ「クラーク」は、各生産要素の生産力の限界効用的一單位を定めんとするものから氏の論法には價値の限界効用の妥當なるを前提したり。斯くて氏は、其の他の諸要素は不變數たるに反し、一要素の可變數たるを假定し、次いで斯かる條件の下に於て生産高に變化あるば、其の變動部分は、可變數的要素の作用に歸せらるべきを推論す。例へば、資本及び其の他の生産諸要素の不變數たることを想像するときは之に適用せらるべき勞働は、其の勞働あるが爲めに添附せられ

たる生産の増加部分が、勞働者の來たるも將に去るも、雇主をして風馬相關知せしめざる底の最低限度を生産するに過ぎざるまで、増加せらるべきが如し」而して此の状態こそ、勞働をして實際上獨立に作用せしめたる、勞働の最終的生産力なれといふ。然るに此論法に於ける最大缺陷は、謂ゆる限界的勞働者すらも、實は刻々に資本等の生産要素の補助を要りて、働きつゝあるものに外ならずして、決して無補助なる獨立の作用にはあらざることなり。言ひ換ふれば、此の限界的勞働者が資本なしに、生産を爲し得たる所のものは、實に資本の有らゆる形式の補助以つて、始めて爲し遂げ得られたる仕事によりては、決定し得らるべきにあらす。

「デー・ビー・クラーク」に次いで來たれる「ハーヴァード」大學の「チー・エヌ・カーヴァー」は一種の折衷的態度に出で、英國學派の需要供給の原則と生産力説とを調和せんと試みたりき。此

の目的上、「カーヴァー」は勞働及び資本に對し分ち作用する所の報酬漸減の法則を論證するの必要に逢着せり。而かも此の法則たる資本に對しては適用せらるべくもあらず。ガ氏の論據たりしものは、例へば製造家が過當の資本又は勞働力を一事業に配備するや、其の過當部分の資本なり、勞働なりが、其の事前に擧げ得たりしものよりも、漸減的報酬を與ふる如き場合あるを高揚するものなりと雖も、斯くの如きは其の者の固有する本質にはあらずして、特殊生産要素の配置方法の粗悪なるが爲めに然かりしものたるに過ぎざるべく、唯だ經營上、爾か爾かの場合には報酬漸減の趨勢の免かれざるべきことを指示するものに外ならず。「マーシャル」教授は其の短所を指摘して頗る肯綮に當たる。(Ibid., p. 169 ff.)

に就て「勞働の限界的生産力」を適用するのみならず、亦た「クラーク」に倣ひて資本の概念を土地の概念に混入せしめ、此の二者の報酬に共通なるものとしての地代の新法則を立せり。更に「エール」大學の「アーヴィング・フィッシャー」教授に至たりては、夙に利率研究の論法の地代研究と同一なるべきの義を高唱し、之を其の名著「利率論」の理論的出發點となせるは、仍ほ世人の耳目に新たなる所なりとす。之を要するに、米國の經濟學者は、今更悉く起つて純理論經濟學上に何等かの貢獻を試みんとし、先づ貸銀及び資本の本質に對つて改造の業を急ぎつゝあるなり。

仍ほ「ペンシルヴァニア」大學の「エス・エヌ・バッテン」教授は、演繹的研究法を高揚すると共に遙かに氏特有の哲理的思索の世界に進み入り繁榮に關する理論と、樂み及び苦みの經濟觀とを立てたり。又後の世に、經濟學の研究上、靜

「コーネル」大學の「エフ・エー・フエッター」教授は其の名著「經濟原論」に於て、單に貸銀の法則

態論と動態論とを大成するものあらば、斯かる方式が大率「パッテン」に出でたるものを看過すべからず。次に重要な一勢力は、其の「經濟學論叢」が經濟學一般的原理の全學田を網羅せる所の「エール」大學の「エー・チャー・ヘッドレー」に歸せらるべし。唯だハ氏の得意は經濟政策の領土に存するものなれば、其の熱心なる貸銀及び利子の研究に於ても、其の成果は「ミル」及び其の他の英國正統學派の結論より、多くは異なる所なきも是非なけれ。此の外、仍ほ新進の學者に「タウシグ」あり、「シーガー」あり、「ダーヴェンポート」あり、米國の純理經濟學界必ずしも多士濟々たらずとせざるなり。

(大正五年六月七日)

倉庫と金融

清 崎 昌 雄

商業の極めて幼稚なる時代に於ては、倉庫業の業務は其範圍甚だ狭く只本來の業務たる貨物の保管をなすに止り、僅かに寄託者をして時の差異に依る價格の高下を利用せしめたるに過ぎざりしか、商業漸く隆盛に赴き信用及び金融の各機關の發達するに伴ひ倉庫業の業務の範圍も亦愈々擴大せられ、且つ他の商業機關と密接なる關係を生じ、今日に於ては必須的の一商業機關として經濟界に重きをなさるるに至れり。

倉庫業か斯くの如く重要視せらるる所以のもの

一、一般商工業者か貨物に關する經費を著しく節約するを得ること

二、倉庫當業者は嚴格なる法律上の責任を以て保管貨物を管理するが故に貨物の危険を可及的輕減することを得

三、倉庫業者の發行する倉庫證券は貨物賣買の用に供し或は貨物質入の用に供し自由に金融の疏通を計ることを得

四、倉庫證券の授受により現品移轉の勞費を除き貨物の輾轉をして容易ならしめ取引の増進を招くこと

等の利益あるか爲めなり就中第三の倉庫證券を債權の擔保として金融の資に充つるの一事は倉庫業の機能中最も重要なものなり。

余は本論に於て所謂倉庫と金融との關係に就て觀察せんと欲す。

二

倉庫と謂へば直ちに倉庫證券を思ひ、倉庫證

券と謂へば又必ず倉庫を聯想する位、此兩者は離る可からざる關係を有するものにして、我商法に於ても特に其第三百五十八條及び第三百八十三條の二に倉庫業者は貨物を寄託者の請求により受託物の預證券及質入證券若くは倉庫證券を發行交附するの義務あることを規定せり。

倉庫證券に關しては由來四つの主義あり。

(一)倉庫證券を全然發行せざる主義(二)單券主義(三)複券主義及び(四)單複併行主義即ち之れなり。(一)は全く證券を發行せざるものにして之れ研究の價值なし、理論上並に實際上の大勢は(二)以下の主義に歸するものゝ如し。單券主義とは預證券を以て賣買質入何れにも併用せらるゝものにして彼の英國の(warrant)は其一例なり。複券主義は二枚證券主義とも稱し、預證券及び質入證券の二枚より成立し、即ち一つは貨物賣買の用に供し一つは質權設定の用に供へ以て金融の便を得んとす、佛國及び其系統を受